

矢掛の歴史地区と大名のもてなし

主要街道と川沿いに位置する矢掛町は、古くから旅人が立ち寄る場所であった。西日本と、別の街道を使えば将軍のいる江戸の新都にも出ることができる古都を含む本州西部を結ぶ旧山陽道の直線約 800 メートルの区間に、町の中心部がある。この一帯には、200 軒もの狭い町家が立ち並び、商売も盛んで、大名やそのお供といった重要な旅人のための施設もあった。

宿場町としての矢掛

矢掛町は江戸時代（1603～1867）に宿場町となった。幕府の参勤交代制度により、地方の大名が隔年で江戸に滞在することになり、そのために江戸に出向く大名たちの宿場町となった。このような旅は、何百人もの家来を引き連れて何週間もかけて移動する大仕事であり、大名とその側近をもてなすのに十分な町家を備えた宿場町に立ち寄るには、綿密な計画が必要だった。

宿場町には、大名とその近臣を泊める「本陣」と、より身分の低い大名や家臣を泊める「脇本陣」があった。それ以下の旅館や屋敷は、残りの家来をもてなすもので、その数は数百にのぼることもあった。

矢掛町の歴史地区は、本陣と脇本陣の両方が保存状態の良いオリジナル建造物であるという点で特別な場所である。1969年、両所は国の重要文化財に指定された。

矢掛の本陣と脇本陣

矢掛の本陣は、石井家が所有する酒蔵の敷地内にあった。広大な敷地は現在も石井家が所有しており、一般公開されている。展示物の中には、旅路の大名が宿主に贈った高価な贈り物や、本陣の営業記録などがある。これらの記録は、重要な役人の名前や彼らが滞在した日付、提供されたメニュー、従者の人数、使われた金額など、具体的な詳細がわかるため、建物と同様に歴史的に価値のあるものである。

本陣の建築には、棘のある塀や巧妙に配置された段差など、暗夜に忍び寄る刺客を欺くための特別な防犯のための特徴がある。リスやブドウの模様が美しく彫られた欄間や、金の装飾が施された襖など、豪華さがわかる名残もある。

本陣から東に350メートルほど行ったところに、矢掛の脇本陣が残っている。この屋敷は豪商・高草家の所有で、5つの茶室やセキュリティ万全な蔵、中庭など、くつろげる空間などが充実しており、大名行列の要人をもてなすにふさわしいものだった。

屋敷は現在も高草家の子孫が所有しており、個人宅であるが、週末には敷地の一部が公開されている。現在の建物は様々な様式や時代のものが混在しており、そのほとんどが 18 世紀後半から 19 世紀半ばに建てられたものである。

過去と現在の混合

本陣と脇本陣は矢掛町歴史地区のほぼ対極に位置しており、この地区では矢掛町が現在進めている歴史保存と美化の営みが確認できる。

メインストリート沿いの建物は、17 世紀から 20 世紀にかけての建築様式を特徴としており、様々な様式が混在していることは、流行の変化を反映している。例えば、屋根には 2 つの共通したパターンがある。ある建物は玄関の上に切妻があり、これは妻入と呼ばれる様式である。他に、切妻を建物の側面に配した平入りと呼ばれる様式を採用したのものもある。どちらか一方の様式を採用する地域は多いが、矢掛町のように混在している例は珍しい。

ばらつきこそあるものの、石造りの土台や外壁の板張りは様式的な統一感を生み出している。町は、改築や増築に自治体の承認を必要とする建築基準を制定しており、その変更は通りの歴史的な雰囲気にも貢献する。電話線は通りの大部分に埋設され、路面は石畳のようにな

っている。ほとんどの建物の入り口は通りに面しており、その多くには歴史を説明する小さな看板がある。

この通り沿いの古い建物の多くは、美化活動の一環として近年改修され、歴史的建造物の中には現在、ホテル、レストラン、ギフトショップが入っているものもある。建物の外観はオリジナルの歴史的建築様式を保っているが、内装の多くには快適さとデザインに現代的なセンスが反映されている。